



朝夷巡島記第七編

村田一



1278
31



1278
31

松亭金水著
葛飾為齋畫

第七編全五冊

朝夷巡島記

浪華

文金堂藏

梓

朝夷巡島記全傳第七編叙

近曾稗史行于世。戲墨者流最多矣。就中

曲亭子者。博覽強記。超于衆。分明古今治

亂。亦能積多年功。而所著幾于卷。未一誤

於機。粵朝夷巡島記者。頗故人未發之妙

案也。縱橫經緯自在。而更出人意表。惜哉



村田



月長二編卷一

〇〇〇

第六編未結其局而成黃泉之客。使觀者
遺憾。僕雖不及其巧遠。知好戲墨之僻。書肆
來請於嗣編。固辭再三而猶不聽焉。於是不
得已。既及採筆脫稿。反復叮嚀。費日月。且
雖勞其神。只是若櫻與棘。花開愛憎異也。
偏慙他方之嘲。所存者勸善而已矣。冀四方之

看官。憐微忠愛志操。開卷幸甚矣。

于時嘉永壬子春月於蓮池畔

茅屋閑牖

積翠陳人題并書



驟雨逆餘
可丹次婆
兼望
乎
齋
家流
人也恨
雞年
可聞



安達景盛の愛妻
無鶴後小
柳宮小召れて側室となる

葛藤憑
大樹
生終迫
倒大
樹



遊谷小五郎
暗氏

素夷狄行
素患
難行患
難君
子無
入而
不自得焉



朝夷三郎義秀

夫本
み
無
の
り
れ
か
か
あ
ふ
人

磐城
四郎
時直
妻
磐手



紙



旅店の主猛八實々
岡田冠者少子
幼名剛若

紙紙紙紙紙



石韞玉而山
水懷珠
而川媚
暉

和田家臣
腰越獸六郎

朝野七緒卷一

朝夷巡島記全傳第七編總標目

卷續輯第一
募慾老婆奸
陷君澁谷棘

一續輯第二
勇士惜嬖妾別
柳營戀情曲道

卷續輯第三
誠忠諫父與祖父
密使渡口失路費

二續輯第四
英雄大罟旅客
說來歷得密書

卷續輯第五
豺狼難義漢非命死
兇賊為陷忠良士

三續輯第六
饗應酒飯畏蜂蠱
美人一曲鑠鐵心

卷續輯第七
以色操英雄
說道清庶民

四續輯第八
再揮伎者拙謀
且勝奸智舌頭

卷續輯第九
奸計弥齟語警城酷吏
天誅直臻隱毒報

五續輯第十
義漢道路遭火厄
忠膽貫主僕再會

總計十條標目畢

○每編姓氏畧目あり今此編ニ新出の者其數多かりきと以て別ニ表出
せび卷と開きと自り知らん

○城戸水草の兩人太田石戸へ使あていき此編ニ復命せど朝夷既小
危急ニ罹は看官遺憾ありと能いど然きとも彼兩個隈ニ時日の
後尚小あひ交小尤けき一奇談あり故ニ后編ニ譲りて記さば

○判五二三田鶴媛等。非命小死し其後と説ごと其違ふればこ
ハ編一至り朝夷三郎鞠繪の尼小再會の話且その賊と撃手の件も
詳小分解をす

○執権の奸謀いしく長ト頼家と廢一實朝と立は義盛頻り小彼と疎
みて和田合戦の崩と含む第八第九の編小至り益佳境小入は者なり

金水再識

朝夷巡島記全傳第七編卷之一

東都

松亭金水編輯

續輯第一
募欲老婆奸
陷君澁谷棘

唐山の常言に日月明らんとすれば浮雲忽地とて覆ひ明君善政あらんと
これと倭臣ことと妨ぐる夫叢蘭の馨も秋風漫小吹損む況や源三郎頼家
卿幕府の嫡子とて居あがるる漢の職小任ト官禄とて不足あはれ竟小端
奢小陥りて日中の終日夜の終夜美女と集めて飲宴を或ハ蹴鞠を心を空後
更小政を顧む元老智臣の諫を納む只管遊興小耽りて因幡前司中原廣光
入道善信和田義盛畠山重忠等の股肱の臣ハ遠ざけらるる月小一度も謁する
ゆる中野五郎能成以下老孝ある小人のと膝下に侍り遊宴乱行の補弼

とるま。さるね。不尼。基政。子。れ。方。の。縁。小。よ。て。右。大。お。家。の。時。威。勢。衆。人。小。冠。
 大。江。守。平。時。政。今。の。執。権。の。職。小。あり。天。下。の。政。の。大。小。と。ち。意。の。如。く。為。さ。り。ほ。
 さ。ま。の。驥。尾。小。附。て。或。ひ。の。此。を。互。利。を。討。ん。と。欲。ま。る。其。の。媚。を。求。め。て。主。君。の。か。
 殺。ひ。冊。き。奴。僕。の。如。く。奪。を。以。ま。す。心。あ。る。輩。の。推。威。を。憎。て。自。然。の。門。下。に。之。す。べ。え。
 中。小。肘。を。張。世。と。憤。る。者。さ。多。う。率。小。朝。夷。三。郎。義。秀。の。伊。豆。の。天。城。の。山。中。お。て。
 か。の。鉄。盾。天。藤。五。が。幻。術。を。の。と。上。と。掠。め。黄。金。の。柱。を。光。棍。り。斬。子。碎。き。輔。小。か。けて。賣。
 捌。ん。と。計。し。け。と。義。秀。豫。て。の。案。小。差。を。その。容。に。て。城。戸。武。詮。水。草。昌。之。と。
 牒。ト。令。既。小。の。群。を。擒。つ。天。藤。五。を。も。皆。俱。小。生。捕。ん。と。思。ひ。く。と。幻。術。と。の。雲。
 を。發。し。逃。去。ら。ん。と。ま。る。や。と。止。め。と。の。ど。射。て。預。せ。た。所。の。痛。癢。小。命。絶。し。其。首。を。
 搔。ち。に。擒。め。り。も。曳。ま。て。頓。て。鎌。倉。へ。飯。米。を。前。司。廣。元。小。執。て。如。此。と。具。小。詮。へ。
 言。わ。く。頼。家。守。て。發。た。り。ひ。且。義。秀。が。功。と。愛。て。直。小。向。注。野。へ。出。坐。れ。ば。北。條。ハ。子。を。

始め。廣。元。善。信。義。盛。以。下。の。く。左。右。小。列。坐。あ。る。當。下。義。秀。ハ。真。先。小。所。遺。し。る。
 黄。金。の。柱。を。雜。人。小。早。持。せ。る。所。屑。を。龍。小。納。め。見。も。雜。人。小。負。り。々。次。小。擒。の。
 草。賊。三。個。を。強。く。縛。ち。武。詮。と。昌。之。小。曳。り。か。て。向。注。野。へ。出。け。ば。羽。林。頼。
 仁。と。高。へ。亮。示。と。突。て。宜。乎。吾。不。明。み。て。幻。術。小。駭。掌。と。黄。金。の。柱。を。
 曳。え。り。返。も。慚。愧。不。絶。と。あ。る。汝。謀。策。の。取。戻。り。の。と。る。陸。奥。の。賊。の。
 經。任。が。股。肱。と。穿。え。天。藤。五。難。を。退。治。せ。む。其。功。技。君。なる。の。り。且。その。
 黨。の。草。賊。と。も。三。個。を。擒。め。夫。が。白。狀。の。趣。き。の。注。進。の。書。を。て。詳。る。と。速。に。半。獄。
 小。下。追。て。刑。戮。を。加。ふ。尙。小。汝。と。争。ひ。も。今。更。後。悔。少。る。と。頻。小。稱。賛。し。
 ぬ。ひ。て。子。自。一。口。の。分。を。賜。ふ。義。秀。低。頭。平。才。を。思。ひ。も。厚。き。衣。紋。文。さ。か。小。
 過。小。恩。賜。の。口。叙。眞。加。小。餘。里。有。難。く。と。の。こ。の。言。票。を。假。し。ば。廣。元。善。信。の。
 義。秀。が。智。勇。の。や。と。ま。を。替。て。君。臣。怡。悅。の。眉。を。開。く。況。く。和。田。義。盛。ハ。君。恩。頻。

小胸小充て老の眼々の涙をこぼし是の今も有難きと俱々謝すまを時
 政父子は是を以て心裡不軟ひむ義秀出陣へ来り湯島沸太郎を搦めて吾
 小恥し今小壺の浦で毒魚を捕へ勇ありと自ら誇り今も君の不討に恥
 敷且捕へ頗る教慢の容へえさる君の功を称しむといふを恐る老の
 ありと思へり渠が面魂あつく小尋常の者るべ竟少の妻家とも願くべき萌を
 含むも知るべき常言の二葉に摘まるとは後竟不芥を用うといふこと
 ありと肚裡不思議なるおろ羽林も入御あれはを従ひ勇へ入る義秀は生
 捕を矢藤五の首級ありとも半獄司小渡り武詮昌之の両個を捉へ意なき宿
 所へ飯をけし六營中の趣き頃小使を常盛以下兄弟も出迎へ縁て備
 の酒飯を出し武詮昌之もの坐小仍り傍這面の功と称し且君よりの賜を
 一遠路の勞を慰むる彼此の詞のさへくある小義秀の額を撫兄公よきのと

る稱しむひと畢竟這面の功も君より命せられあわぞ一夜は物語を兼り唐山
 の奮記小あつても思ひ出さるは必定幻術と行ふ賊の所為あらんと素しふけ
 且この身より望てあや所少聊功ははあ似れどよく思へ人の知らざる
 君の非を奉ゆふ似て快くもはらむと回答て霎時歎息をその折父の義盛の營
 中より退かまつ上坐小居て左右を祝ひり這面三郎が手柄のやど今小始ぬるさ
 歎賞小堪ざると因て君の心より太刀を賜りける勇士の誉ありといへども二
 層の禍を醸せんれと吾へ思ふ北條父子が今日の動靜心泊がたる多し各由
 一あつて一家の偏執る義秀屢功をさ條にうての推責といふも憚るは
 挙動を心憎しと思ふあり然とて彼家門は媚福ひ馬前の塵を拂へといふあり
 あれど時勢を顧み己を曲て宜小従ふもま君子の道あり国道あれは矢のや国道
 ありも夫のやと孔支子の説くと王光祿の風ぬり屈曲俗小従ふと世説小あるは

思ひ合を。才の多しと國ふあを。然るも。自ら世間を憤。あきぬ。徳道へ
陥込。あり人我。あく凡俗。ありて聖賢の域。ふむ。ね。この惑ひ。と。困悟。だ。じん。び。よ。を
と。説。示。せ。三。郎。義。秀。の。固。より。あ。居。あ。る。人。々。の。教。諭。を。會。道。理。と。感。得。け。り。ゆ。て
羽林頼家卿。い。ち。く。思。ひ。巡。ら。し。る。人。か。り。と。大。樹。の。任。を。被。ふ。り。四。海。の。政。を。執。る。才
ゆ。て。匹。夫。草。賊。の。幻。術。不。惑。ひ。多。くの。宝。貨。を。掠。ら。し。と。あ。ま。た。恥。辱。を。凌。の。世。を。で
遺。さ。し。し。り。と。渠。の。く。申。け。り。て。吾。過。を。補。ひ。ぬ。ま。坐。の。賞。不。秘。祭。の。太。刀。一。口。の。共
え。り。と。思。ふ。吾。も。昵。近。ま。る。の。會。莊。園。を。充。行。ふ。不。集。ま。と。さ。せ。る。沙。汰。及。ぶ。因
て。先。頃。父。義。盛。故。右。幕。府。の。お。時。小。馬。の。飼。料。と。か。恩。あ。じ。相。摸。の。国。三。浦。の。郡
矢。部。の。壯。を。と。義。秀。小。讓。と。さ。る。願。文。を。寄。せ。由。り。廣。元。等。より。言。用。さ。り。あ
あ。ど。紛。と。そ。の。ま。小。閣。より。丹。の。父。より。子。小。讓。固。より。何。の。仔細。あ。ん。と。され。と
吾。此。の。所。ふ。あ。き。と。這。回。の。賞。は。一。箇。所。の。莊。園。を。充。行。ん。と。勇。士。と。愛。ま。の。心。より。

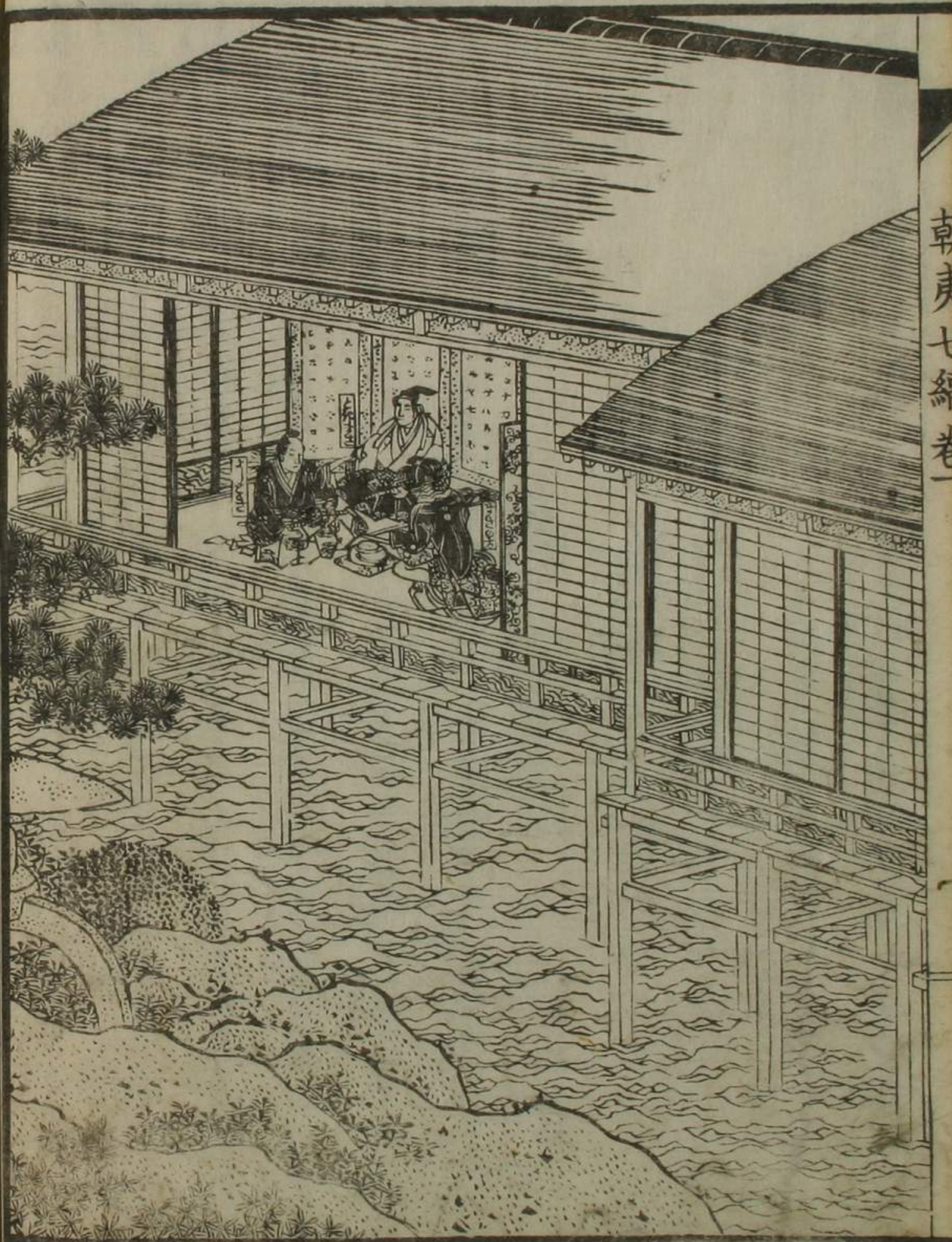
廣元善信と召ひひき。命せ合め。は。兩個。も。て。此。と。と。あ。い。づ。る。あ。い。あ。き
と。と。上。と。と。憚。り。執。権。の。慮。や。と。詔。と。口。外。せ。さ。り。し。と。今日。の。命。を。僥。倖。小。松。に
如。此。と。は。淀。の。教。遠。別。録。一。達。け。と。は。時。政。の。縁。と。り。善。も。思。ひ。の。義。秀。が。多。羽。林
手。自。一。口。の。太。刀。と。褒。称。あ。じ。し。と。心。不。快。と。さ。る。今。ま。の。莊。園。を。充。行。ん。と。さ。る。い。は
嫉。ま。り。く。あ。り。の。く。眉。と。顰。め。君。の。命。小。憚。に。あ。ね。ど。い。ま。若。年。小。ま。り。ま。す
々。賞。罰。依。帖。の。い。沙。法。も。多。い。這。回。の。一。舉。義。秀。が。功。あり。と。い。ひ。ひ。と。取。足。さ。る
草。賊。と。五。人。三。人。伐。ら。と。と。と。と。と。答。と。す。小。足。ら。凡。七。莊。園。を。充。行。つ。と。故。幕。府。の
お。時。功。の。淺。深。ふ。よ。と。定。め。ら。賞。罰。ふ。と。と。と。の。国家。の。政。行。を。ば。り。也。君。の。臣
従。ふ。は。と。責。を。等。よ。く。思。惟。あ。る。下。在。下。も。猶。再。思。と。愚。存。と。述。下。と。あり。け。し。と。兩。個
の。案。小。相。遠。と。例。の。遠。及。が。偏。執。と。と。ひ。ひ。け。し。と。執。権。の。刃。と。お。返。返。術。の。後。の
評。議。と。俟。か。る。と。小。時。政。の。館。へ。帰。り。室。家。牧。の。方。及。義。時。と。を。く。招。き。せ。せ。と。如何。ふ

の免拒まな。你達を真見受ま欲と耳傾けて論を寄まば。牧の方の波も敢て黒さ齒莖
と見り心は若年といひあり。羽林家のいと鈍ま。尚小義秀小壺の流ふ。二隻の鯉
魚を捕下より。まある勇士と賛あふ。平生と波のうら。渠が所為の食ふた。と思ふ
よ。て這面のも。は身の不明と顧みあふ。かの追て改む。この賢者の風も有難は心操
とひい。て義秀の賞。あふ。この所謂更なる。奈何といふ。おぼし。て。假令その。殺
て。君の罪。換小あり。然る小義秀その。勇と黠と自ら落す。ま。る。白ふ。その。賊と
撃。且擒。て。罪と訂ま。その。所為忠ふ。似。ま。ま。其。実。の。君。を。暗。愚。の。傍。と。四方流
ま。ま。思。後。の。人。を。邪。結。ふ。へ。暗。や。の。恥。を。明。く。顯。り。し。り。その。人。と。功。あり。は
所。領。財。宝。の。賞。を。充。實。小。忠。義。の。武。士。の。何。と。り。功。を。賞。せん。この。三。歳。の。小。鬼。を。介
鮮。ぬ。易。さ。ば。ば。る。く。加。之。かの。賊。は。陸。奥。の。賊。将。を。修。羅。五。郎。が。股。肢。ぬ。て。幻。術。の。書。と
待。や。と。義。秀。奪。ひ。つ。る。と。然。ま。其。書。と。速。小。将。軍。家。呈。さ。ま。ま。と。知。ら。ば。顔。と

秘あ。く。の。り。つ。あ。つ。下。心。死。量。ら。ま。ば。渠。勇。力。の。あ。つ。く。小。方。夫。不。當。と。波。く。小。備。の。秘
書。と。熟。讀。し。雲。と。鼓。一。雨。と。招。び。隱。形。奇。怪。の。術。と。ま。ば。天。下。の。累。以。陸。奥。の。徑。任
小。十。倍。あ。つ。ん。君。執。権。の。お。ん。身。と。う。て。夫。等。小。心。着。る。ゆ。え。捨。た。さ。る。入。寛。小。進。る。か。計
ら。ひ。と。必。ひ。て。ま。ま。然。ま。と。妾。の。浅。さ。る。る。女。子。の。身。に。て。政。小。に。と。出。ひ。必。け。ま。と。つ。小
と。向。せ。あ。ふ。い。る。る。人。が。隨。言。と。心。隈。あ。く。言。は。ま。お。て。い。あり。を。用。う。と。用。ひ。づ。と。へ。君。が
小。仕。せ。る。以。且。義。時。と。商。議。あ。つ。て。計。ら。ひ。い。と。言。し。り。當。下。義。時。膝。を。て。母。の。仰。至
極。也。在。下。が。ま。と。差。さ。る。一。件。和。田。の。族。等。舊。功。小。募。り。我。言。と。ま。て。昔。家。と。茂。如
小。ま。然。る。小。義。秀。武。勇。あり。今。より。君。の。寵。小。誇。り。を。威。と。逞。ま。る。ま。り。の。あ。つ。頼。て
天。下。の。礼。と。生。せん。願。つ。い。る。ま。ま。ば。渠。等。鼻。と。挫。ぐ。小。如。ど。と。波。て。時。政。莞。尔。と。笑。こ
你。達。兩。個。り。を。為。の。陳。平。子。房。と。い。へ。ま。ま。り。の。あり。如。此。あり。と。思。ひ。て。次。の。日。宮。中。へ。出。仕
る。廣。元。善。信。等。小。是。と。傳。へ。且。羽。林。家。へ。尼。の。輩。を。仰。あ。ま。ま。若。あ。ま。ま。此。心。ゆ。え



父子夫婦兩室人



とうたつた兩個の老臣、こゝに怪らぬ北條が計らひ、心も駭くもの、尾御堂も既
 小言上のほるれ、今更に詮方なく、快く口と喋む。折々言次の若侍、國の彼方小千
 とほろえ、御召小よりて朝比奈刀祢、即ち之を来れと聞て、時政肥て受、真々
 こゝへ喚出せと。の間程なく、朝夷三郎、衣紋製い、立つて、廣元善信、心は
 這へ何更と見合との。時政扇で笏小採り。唯今義秀と召くこと。各へいま
 が告げ、老の鹿忽と思ひ、もんが。緯多心にてそのうと。告る小暇なき故あり、今
 義秀小問と。其縁故と知るもの。會釈返す、此方と向き。やれ義秀兼か
 這回天城の賊と撃。將軍家の御心と懸り奉る、一段の、手柄も、習つて羽林家
 小も満足小。思ひ召る所あり。然るに、你々の砌、賊首、鉄盾、矢藤、五、所持、じ、る
 幻術の書と取揚、は、と聞り。され、速小、將軍家へ。献ぶべき苦、と、合に、於て、其
 候、且、演、説、も、及、ぬ、ぬ、秘、小、書、と、奪、ひ、お、き、術、と、字、を、人、為、す、を、君、の、御、心、を、

深きふり。在下と多く正さる。直さるその書と出、小、於て、今、ま、を、秘、す、罪、責、を、
 る、時、政、言、言、法、を、看、り、ら、る、方、の、あ、る、一、如、何、小、朝、夷、義、秀、と、膝、を、連、り、て、若、を、
 向ふ、ま、下、義、秀、世、を、務、め、ら、ぬ、い、ふ、小、其、書、の、宣、ふ、と、矢、藤、五、と、討、つ、た、果、を、懐、畏、
 秘、し、し、と、在、下、午、自、取、揚、と、持、帰、せ、し、ひ、い、ふ、こ、這、い、る、治、め、任、任、が、并、持、り、と、矢、藤、五、が、
 奪、ひ、て、逐、電、を、う、と、い、下、の、地、小、在、の、と、聞、さ、る、い、や、と、小、幻、術、の、書、の、と、括、て、
 見、る、小、隱、語、り、と、書、記、せ、り、め、る、と、倉、平、の、間、小、解、ま、さ、る、い、思、小、是、と、解、し、て、
 とも、國家、の、為、小、要、る、術、を、却、て、他、小、惡、逆、と、初、め、後、と、存、ぞ、う、時、且、過、さ、
 二、奉、と、焚、て、灰、燼、と、り、畢、ぬ、勿、論、と、の、賢、慮、と、窺、ひ、け、ら、ん、と、存、せ、う、と、固、く、を、
 勿、の、書、と、分、捕、と、差、上、よ、の、命、あ、り、誘、す、か、す、く、差、出、え、と、鳥、海、の、事、と、存、す、其、
 小、焚、捨、て、い、る、と、何、屋、ら、に、述、け、る、時、政、再、ひ、い、ふ、と、さ、る、要、時、は、と、喋、り、が、か、ん、
 執、権、の、威、を、た、小、似、す、と、忽、地、小、呻、吟、す、其、小、虚、言、を、た、小、放、つ、と、甘、ん、度、も、た、え、ね、と、焚、

捨うといふまで。燈明をまきともく、唯ふの虚実をわんいふ。又か実を其の
 證文を献らんと。倘焚拾と虚言を秘小藏、あつてあふ其の固より三族を其
 科を被らんと。赴と書裁と。科紙硯と。寄其朝美の前へ。居と。義秀現ひま
 うせ。仔細不及ひい。と。執権を指揮のまめく。証文と認めむ。時政を。續下
 へ。兩個の老及。向ひ。俸如。や。い。在下上の言。あひん。足下。心ゆまう。う。席
 と。と。奥。う。不。朝美。も。暇賜。宿。飯。り。と。父。義盛。と。兄。常盛
 小。と。演。説。り。あ。時。政。の。書。を。り。時。望。と。密。計。の。補。ふ。さん。を。巧。り。と。その
 面。持。と。察。する。と。焚。拾。う。とい。ひ。粉。り。望。と。の。や。証。文。と。認。む。飯。下。り。と。実。の
 かの。書。を。焚。拾。り。固。う。幻。術。の。書。ふ。る。国。家。の。巨。害。る。り。の。う。都。て。その。妖。魔。と。解。の
 術。と。書。裁。れ。へ。倘。敵。有。て。あ。ゆ。と。施。り。の。あ。ん。と。ま。と。控。の。助。あ。い。益。と。う。と。と。と。
 か。び。因。て。深。く。秘。て。柵。下。惠。の。膳。と。え。老。て。養。ふ。ふ。り。の。以。盜。拓。の。ま。錠。と。用。の。用。

ふ下と。言。い。と。る。人。聖。賢。の。書。の。用。う。所。善。う。と。悪。い。悪。と。り。邪。の。書。の。取。り。善。れ。り。國。家
 の。益。の。と。ん。ん。や。也。の。言。ひ。ま。も。る。理。の。ゆ。と。邪。の。書。を。惜。む。怪。く。ぬ。証。文。を。献。じ。
 在下。心。と。訝。す。あ。ん。れ。と。の。弊。訣。と。言。ひ。の。と。と。て。義。盛。う。と。点。頂。と。ち。乃。理。の。と。
 ち。彼。人。の。奸。佞。あ。り。以。後。猶。心。と。用。ふ。と。と。の。不。慮。と。そ。う。け。り。奥。小。尼。御。堂。攻。子。の
 方。羽。林。家。の。心。よ。う。莊。園。二。所。と。義。秀。小。賜。う。の。御。沙。汰。を。れ。と。這。決。て。思。ひ。も。う。れ。
 偏。小。依。帖。の。記。計。ら。ひ。思。ひ。ま。う。あ。う。宮。へ。あ。れ。然。ら。と。時。政。密。告。一。人。尼。御。堂
 点。改。め。ひ。つ。も。渠。小。莊。園。と。共。る。や。の。功。の。れ。と。の。り。將。軍。家。三。妻。程。と。言。ひ。下。と。
 て。羽。林。の。所。に。余。あ。り。時。政。が。言。せ。陸。を。と。れ。と。止。め。う。あ。り。と。羽。林。も。適。う。と。言。ひ。下。と。
 ち。あ。り。と。心。中。小。い。と。う。憤。と。あ。り。の。と。母。の。命。を。今。と。小。辞。ひ。き。小。ら。と。れ。程。と。う。
 回。答。ま。う。と。せ。け。り。と。吾。天。下。の。主。將。と。て。一。箇。所。の。莊。園。と。と。の。あ。り。と。打。惜。と。
 業。あ。り。と。世。と。無。福。思。い。と。の。程。日。来。と。者。と。の。程。と。鞠。と。催。と。と。も。あ。り。と。將。と。

朝夷七編卷一

過さむかへて偏小朝夷を莊園のこのころは廣幡の局と定まると容顔美廉の
あつて声よく謡ひ舞をまひまの道も暗くは始めて宮中へ召されよう二あるのみ
愛ありて覺異連理とかくひの明暮傍に離れは漢帝の李夫人唐帝の楊貴妃
が寵をも肩のまゝ慈情と運ひのひの小頃聊の芳き。竟小重りて空壇のむさ
まくの世と公へ羽林家の管悲しく哀傷をなほほどり會者定離のあひ
差方の殿と塊の土封じぬかぞかと小羽林家の夜とる昼とるその傍に
慕ひて物狂のまゝとふひ細く寝食をう不安のあひ斯て死の結がれては病
の出りせんと例の中野以下昵述の面戸管の云と慰むれと慰めらて諸俱小晴
時ある折るまゝ羽林いと世間と要るなるの思ふも是ころも北條家推成の誇
は故あり。思召者ともあれどとて今速く如何と申すと尋るは頼朝日小
積り勝ち一夜の宵は初甲乙うち集會何なるの慰めんと在と無とるべ

帯で出てうち笑ひその奥もまゝの中小治谷小五郎晴氏が扇と把て掌と
當り初旬雀の雲の神幸の折在下適暇とゆるまゝその行装と現のいと編笠
小面と掩僕人とて彼処へい人まゝの中交アて是で見物する然る小在
下と肩と並肘摺あへて見物する女子の顔は薄練の被不定なるれども蘭麝の香
を顔郁くそえぬ心地せむ小猶面影の床もて立花む人侍傍侍あふま
後へ回してまゝも明地を侍女婢女と徒者四五個在下挙動いと怪む
けん婦人小何やん低語て是と早も彼方へ在下のまゝ執念くいとまゝ笑ひ
と後方小着ての端小羽と吹来る浪風小被の内アと候小趣と思ふそ来小作天候
ちんちん花洛堀河白柏子の母格あまはなほめするの地下も来ん流人小れ身と倚
と不審と母格もうち微笑せ方来王妾の地来しゆまは名折と美と今
主ある身の上訪来らせんゆり得るは意外の疎遠小ありなると君小の恙

丹押さる水濁らば晴氏君の多小懐らんと道ありぬと以初めまわらば
不善と諫むるこそあつらん。悪醜と國家を乱れ尙号と忍ぶべし。孰れ
忍ぶべしとせん

續輯第二

勇士惜嬖妾別
柳宮恋情曲道

再説羽林頼家々々如何の一日の早くかの美女と祝あんのことと併
あつどもいまだ然るべき便で成得ば除るること堪兼多ひて中野五郎の密ぢり
その計策と禪らひあふ渠の固う好佞と生伶俐あるまは君の傍小膝と進め侍
伴今朝笑るあり頼て老臣答とるよと君へ認まうとさふ當下箇様の嚴令あは
安達景盛と造らんと更仔細いまだ如母と渠が居るる猶在下等力と獨
あつその美女の伴いと籠中の多は抗むよういと易いと辨るげ不言すあを頼

家莞示と笑のひ今始めぬ侍が即智かと感どろ所ありと頼て小膝侍
あふは侍居るる渋谷時氏小膝と進めて言す。こと究めて良計あり然れども
よふ一箇心小掛るとのい弁と彼朝夷と秀あり。渠近習の列あつて在下等と同僚
あつども知右如く年ふ似けあは強者ああるまは左様の企あつて尙ほか
賢者うて君を諫めも奉る。吾們と誠むべし中々小面倒る人景盛
の他ふ義秀も退けまはの辨就とあつて中野能成といふ心の着れり。渠
聊も安あつ時この計策行はば如何と退けんや。良要は思案あつて人
あつとち点以たれまのいあり。君の知召るる。先頃陸奥岩城の郡小論の
あつて百姓們黨と括ひ脱ふ乱逆あつて地頭も漸く制止めらるる強動あ
あつとちいまだ裁断のあつて風不安然るべきに使とらまはて換断裁行あつて
あつ然もあつその命と被り人あつてあつて義秀の勇略のこゝ曆并推歩のあ



安達少将
安達少将
安達少将
安達少将
安達少将
安達少将
安達少将
安達少将
安達少将
安達少将



安達少将

安達少将

安達少将

又も習ひ浮てありと人の其検断と渠の命ト遠く陸奥へ送送るの内外の務は事
 ざん。子儀の言まふぞ羽林熟聞し渠を退るの宜くもあれその近習者
 任すは賦税の正公掌る者ありて曲くそのこと執権に然るも尤益
 下。他子まといえよ命不能成膝成進め如何も渠は仕ぬあねと君の
 命るべ執権も手拒らんまづ免小角小あり以命せよと下と言ふければ
 頼家の言兼ふと候ひの多中野能成の前と退出執権の詰野と云り
 小使の男と候ひ吾内執権へ言ふ系らすのあり若くは此の所へ入ある言
 せといへかの男は得ん如此の言はあぞ君のに従と取次の常より言ふは時
 政の應と回答に被成はは能成の未坐下りて礼と云。惟今君の命あり先頃岩城の山
 論のて然るべき人と擇み検断をせめんと言ふ其後絶て何の沙汰もせし義秀は
 青春あると方す不達とて才智あり殊に渠の国久き住して人乳と知り候

とこの這回の検断の渠の倍とありと人の強執権まじり決ト異議あり由心
 義秀の命と頼と出せんとの候はあけり在下是と兼り。あは賦税小拘らず
 徒の仕あると義秀の命せとんは何あんと存せとと君あり殊に義秀と
 愛をせととの餘り猶も功とせとせと在園の二所も二所も。宛行のれん心
 と推しよ強ふは流めり奉らん。執権の言述て賢急小任をぬくと支ん
 時政速めの回答のるは眉と頻めて雲の考へありつ。忽地小掌と徹とらあ
 山論の起るとの尋常のふら陸奥の賊將経任が押領と在るに彼口
 後その地所とま先主へ返さる元来遠境のふら其人乳も標し人乳と弱
 三は採むるやふ。さる發動とらなり。然るに検断の使るの量勇あり
 人小地利美術と精をうま。者ありの悦ひが。然るに賦税と掌て其長
 言の生憎小勇あり。まその勇ありの美勘小精が。故小用と擇

こゝ延引及ぶの処る得小居へも居たり。義秀との思召心著る所老
 臣等と商議あり其教討らるべしと之能成候御ありぬと心腹不敏ひ別とて
 入らる程日あせむ時政治め廣元善信等二谷小居の拜謁を就ふも羽林家
 則出御あり各席と云ふと三河の国より早馬来り注進の教を去ぬる月より
 當所所と群盜起りて良民と害に守護人地比苦人数と集めこまて平げんと
 致せども賊の次第不勢加り。礼妨殆言語不承えり。何卒然と軍將と下氣
 早く平治ありめば無越にたふふいと祈て候。誰ぞ付手の將とて彼地
 へ向せしと云けしと頼家の縁で中野能成言へる。爰ありと左右の袖と撥
 合せと人数の多くも野伏強盜の所あるべし何茶との有とされと早く討手と向
 小あり。其討手將とるの安達景盛の仕あり。如何とあると三河の渠が莊園と
 頼朝頼朝命とて。命不周と老臣等とに理あり。此定あり。即安達景盛とて

事と傳えり。唯今仕あるべし。使と下ら。當下時政君小對ひ陸奥岩城の山論
 のあり。然るべき人として。檢断遅引と及び。君の義秀よりて其任不宛の
 あり。彼の中野能成より義秀の則老臣と評議あり。いふ義秀と究めて。願
 ひの順序義秀とわけし。命とあり。有難く候。頼家点隊の
 汝等善と云ふ。分換けんと仔細あり。頼朝と宣へ。未とて義秀が件に
 未。斯て頼家右のより自ら命とあり。朝夷義秀の義秀の命と辞む。いづれに在
 下不才の身と依て。山論以檢断。此彼と決。言え。いふ。いふ。この思慮
 深く美劫小園と人の仕あり。是れ等争克と。いふ。敢て北條時政と派
 くと。これ義秀汝遠路の勞以厭ひ。卑下を免と。為りの死を復ると。親小如
 未。此と知ると。君不在り。汝左不の智量あり。争君の命とあり。吾と作り老臣
 あり。其は彼と從人。汝とて。才あり。斯列席と命せ。夫と辞む。

は若年あり君以悔下奉るふ心ぬぐと情る也。義秀再び羽と返す。辞ひてふ
あふまふ。今畏くひぬ。彼令水火の中ふふ。宵に奉るべきあふ。唯その位あふ
かきと。且辞退言せまふ。は許るべ。彼地へり。辞ひて言えんと其席と退出る。
程のらせば。安達景盛召ふ因て。参上。羽林家則三河国の賊と強む。と命せらる。
まの景盛。一儀及び。領掌を退く。北條下の老臣。あふ。席を退き。爰
ふ。於て頼家の侍。中野の胸中。よめて。妨るべき。の。情を退る。便ぬる。と。不秋
ひ。能成。屢称。ゆひ。奥。安達景盛。三河の群盗。強む。君命の下。す。勇
士の。勇。ま。規。摸。を。在。番。て。京。師。在。る。三。年。わ。た。る。着。帰。ら。う。い。ま。半。年
も。ま。ま。の。命。の。下。と。世。の。人。の。あ。や。彼。国。ふ。己。が。領。を。壯。園。の。わ。り。の。ふ。と。も。
ま。守。護。の。地。隊。隊。あ。つ。ま。ま。の。あ。ぬ。野。の。一。揆。を。後。ひ。る。難。と。あ。あ。の。執。権。の
計。ら。ひ。免。ふ。角。ふ。は。る。の。世。の。中。と。あ。あ。わ。ら。ふ。つ。て。彼。世。を。名。残。と。し。人。の

情もして頼み出の去勢のあけきと。遅るる。臆せし。毒蛇の舌。改小係。も。皆。恒
い。ご。と。人。数。の。手。配。を。な。め。准。儀。の。大。か。と。替。ひ。ぬ。あ。ふ。世。能。の。景。盛。の。對。ひ。か。く。の。言
ま。首。途。の。忌。り。と。て。裁。不。障。を。い。く。阿。の。も。あ。の。ん。が。ん。を。裁。場。の。條。む。の。の。が。と
忘。し。妻。を。と。忘。し。今。は。羽。毛。の。将。と。比。し。と。金。鉄。を。重。と。し。活。ん。と。願。は。ま
と。ん。這。回。討。手。と。し。出。立。の。い。と。勇。ま。ま。く。武。士。の。た。ま。ま。う。の。栄。を。あ。と。勝。負。の
の。運。と。や。必。び。賊。等。を。伐。平。ら。げ。め。を。さ。飯。陣。の。あ。や。否。の。の。い。ま。ふ。ん。が。ん。尋。た
の。旅。路。も。別。小。袖。と。絞。る。の。の。あ。て。世。間。の。情。も。軍。あ。る。君。と。い。へ。み。ど。此。處
あ。く。後。と。死。あ。つ。と。も。せ。る。も。君。お。仕。せ。の。の。あ。ま。ま。の。彼。處。へ。伴。ひ。あ。ら。う。
と。赤。心。を。え。て。啣。つ。ぬ。弥。武。心。の。景。盛。も。何。と。の。ん。を。羽。毛。の。雲。の。眼。を。塞。ぎ。て。あ。り
け。う。忽。地。呵。と。ち。笑。ひ。心。弱。と。い。の。の。命。を。捨。て。敵。お。む。ふ。お。ち。て。軍。陣。の。あ
ひ。の。と。開。敵。お。む。の。の。の。這。回。の。の。野。伏。も。黨。と。結。び。て。札。坊。の。す。の。且。て

粹十二分不仕裸せるん心を棄るゝの事と更なる事と氣久もろく茲の准儀を急うや
 武詮昌之の兩個と折き粹をせゝるふらう汝達友個とおて往下吾武略と心不掛れど
 いまご美法のた小疎一這回この田田溝血於て美と國ととて才一の要とすく下汝達西
 個(其た各困らる者も)びバ羽翼とらうりといひの事ある頃掌せり。然る日わは
 茲の準備残すも整ひければ宮中へ出ては暇とまう。諸執権と姉あまふてのよ下痛況多
 父と同胞も別とて去てる地を奔走すおけ。斯有ふけは中野以下阿倭泊使の城
 ども。その妨の第一身盛に出陣させの獲身が朝夷も脱陸奥とて往れば今猶豫
 大さふあひ然ととも景盛が館守の守の儀をあく。輒く世務の傍へ逃ぐるも物
 へさ加梅を面赤谷の方より消息せの。其後敢て音信せよ。這回の舉世務は
 ぶ多うある限す忍びたす攫ひて走らんとせの諸決の所為ありとていひよる
 過のあんも知れ。然るに其由を密す若くは討らば何の仔細あるべきありとて

この晴氏討らるる事善とて此れを然らざる晴氏熟思惟をせり。一四内
 通を討らるる事善とて此れを然らざる晴氏熟思惟をせり。一四内
 披くまふと思ふやうに渠が親系仲堀河よりとるる異美の披き計策の
 その園おらうと披きしむるに於て。一臺の言を為るとの集が
 底を如何の事とせむ。今も人々忍び入り宮中へ伴ふ人多し。明地おひ
 僧で万一猝のあふおらう。是の事とて。景盛園の備えあり。俗わの
 事のある夜お紛して忍び入る。矢度お奪ひまらん。如ぞと衆評區々決せし終
 り。この後日の証の言を書翰とせらる。不意お奪ひま倍とあり。とて
 多中野以下五人のめい文替甘繼へら。安達が彼と往つ戻りの窺入る。更みせし
 便にせむ時。如月の中旬。檜のたの且。園く多し。いと真あり。空々風
 寒う。山の出る夕月。夜籠お夜む。在るもの。宋ある心地を。世務は

いと花やまのまゆもくを新て晴氏能成号かの乗抱と急ぐて奥に殿へ昇入
 させ此処にて動静と窺ふふ此とありて受けまの則老女對面あり乗初のもも長と通
 じて雅人們の常ひに己が結所へ入り老女へ臥て乗初の戸と引開つ世終が途方ふ
 暮るる景勢あり成方り佐け湯をどとあえ輝いた方活有様より成のへて美知
 るらん此処を羽林家の江所ぞう成おん月を住ま巨局の局より命およりよく補
 理て召仕ふ女子のり是れあつと彼老よりと成と對面とせりめ七瀬女ふり
 心どゆ二個とふ名揚すの則局へ侍るふその流らるる言語お成て物のり成るるぬ
 ちり成ておふふの世終と湯へ侍るひ湯と流せ後へ成の晴衣裳とあは後
 ころまがる格ひとて此方へと高の局へ誘ひて純子の褥お居らりあり高杯お
 盛て出れ菓子と月おとぬ物ぞう世終の愛のうちに猶後入るる心地とそ
 善悪とて人辨へん要時ありて向の老女が今宵月始りて未あひる耐いふことと

白拍子を数々召きて酒宴あり休息あり其席へ案内して参り居にも
 筒より後せぬとらふ小因て世終の覚來るも身と起せ老女はへ湯とて
 いも遙けた廻廊と彼方此方と成りて成りて廣らるる折るる実金燭銀
 燭の音より明く連ね白拍子どもお成りて舞曲とるひその正面あり
 君とおなり曲録小傍副のひお成りて美女お酌とて舞と視つ奥のめかて老
 女の世終とえん前近く進ませつ今宵召させあひつる世終お侍るると會お款とま
 ま頼家の兄とて祝のふ現不晴氏と言葉お差りて天然の容色の天津し女
 が影向とてこの世とあはれ勝とて泰の阿房おゆとて三千の美女とておは
 吾傍とてや仕ふ女ふの逸と容貌の勝りのの重とてこの世とあはれ勝とて
 敵とておのこころと心中十二分お敵おひひの事と世終お下さるあぞ世終縁とてお
 なるの命ありとて義とて是れお許とて思ひにけ不束とてこの身を

まを愛^あめ^めの^の実^みの^の勿^な体^{てい}の^の所^{ところ}為^なる^ると^と。その^{その}心^{こころ}不^ふ悖^{はい}也^や。其^{その}益^{えき}と^と罪^{つみ}深^{ふか}く^く。皆^{みな}
 谷^やぬ^ぬぐ^ぐ言^{こと}葉^はの^の下^{した}安^あ達^だの^の刀^{やいば}祢^ねの^の正^{ただ}室^{むろ}の^の及^{およ}殊^{こと}不^ふ彼^か人^{ひと}ま^ま主^ま君^{きみ}と^と作^{つく}ら^らし^しめ^めり^り。其^{その}新^{あらた}と^とな^な
 の^の斯^{ごと}ま^ま不^ふ厚^{あつ}と^と心^{こころ}を^を如^{ごと}何^にの^のせん^{せん}と^と忽^{たち}地^ぢ心^{こころ}を^を翻^ひく^く。其^{その}益^{えき}と^と賜^{たま}り^り。其^{その}夫^{その}より^{より}其^{その}罪^{つみ}不^ふ
 ゆる^{ゆる}て^て種^{こゝろ}の^の與^あと^と副^たる^るが^がど^どふ^ふ羽^う林^{りん}の^のこ^こま^まと^と三^{さん}た^たる^る者^{もの}を^を思^{おも}ひ^ひめ^めて^て片^{かた}時^{とき}の^の信^{しん}と^と
 離^{わか}れ^れて^て龍^{りゆう}愛^{あい}目^めと^と泳^う増^{ぞう}り^り。か^かの^の唐^{たう}朝^{てう}の^のそ^その^のむ^むり^り。揚^{やう}家^かの^の女^{むすめ}兒^こ宮^{みや}不^ふ入^いり^りと^とす^す六^{ろく}
 宮^{みや}の^の粉^{こな}黛^{たい}顔^{かほ}色^{いろ}と^と白^{しろ}樂^{らく}天^{てん}の^の賦^ふと^とす^す。今^{いま}更^{さら}思^{おも}ひ^ひ遣^やは^はら^らせ^せり^り。

村田

朝夷巡島記全傳第七編卷之二畢

~~Handwritten scribbles~~

Murata

